
子ども理解のための散策体験から見えてきたもの

— チャイルドビジョンを用いた子ども体験を通して —

三宅 美千代

Child Understanding to be connected from a Walk Experience
— Through the Child Experience using the Child Vision —

Michiyo MIYAKE

キーワード：こども環境、子ども理解、子どもの健康と安全、自然体験、自然遊び

子どもと関わる経験が少ない保育学生が、子ども理解を深め子どもが安全に過ごすことができる環境を理解するために、子どもの健康と安全の授業ではチャイルドビジョンを装着した散策を体験した。散策後のレポートにおいて、子どもが興味を持つと思った物や場所について保育学生は、植物や生き物など自然物や、子どもたちが自然遊びを体験できる場所に対して、より興味関心を寄せていたことが明らかとなった。それは、保育学生が子どもにとって自然の大切さを感じているからこそであるが、しかしながら昨今子どもたちばかりでなく、保育学生自身も自然と触れ合う機会が失われつつある中で、今後どのように保育学生に自然を体験し、自然の素晴らしさや大切さを涵養していくのかの課題も示唆された。

1 背景と目的

「少子化や核家族化、地域との繋がり希薄化等の影響を受け、子どもと関わる経験が少ない、あるいはまったく無い状態で入学をする保育学生が増えている。」ことを三宅（2022）は指摘している。また、「そのような保育学生に対し、人間にとって極めて重要な時期である乳幼児期の子どもを理解する学びを育む責任をもつ保育者養成教員の役割は大きい。そのため各授業内においても、いかに保育学生が子ども理解を深めることができる授業を展開するかが重要な課題となっている。」と述べている¹⁾。そのようなことを踏まえ、子どもの健康と安全の授業においては、チャイルドビジョンを製作し、子どもの視界を体験しながら、子どもの理解を深めるという取り組みを行った。取り組み後はレポートにて、子ども体験後の気づきをまとめてもらった。本研究は保育学生の子どもの体験における気づきには、どのようなものがあるかを明らかにすることを目的としたものである。またその体験を通し、保育学生が子どもの目線に立って安全を確認したり、危険を予測する技術を深め、今後、保育者として保育現場において配慮すべき点を自ら考える力につながることを期待する。

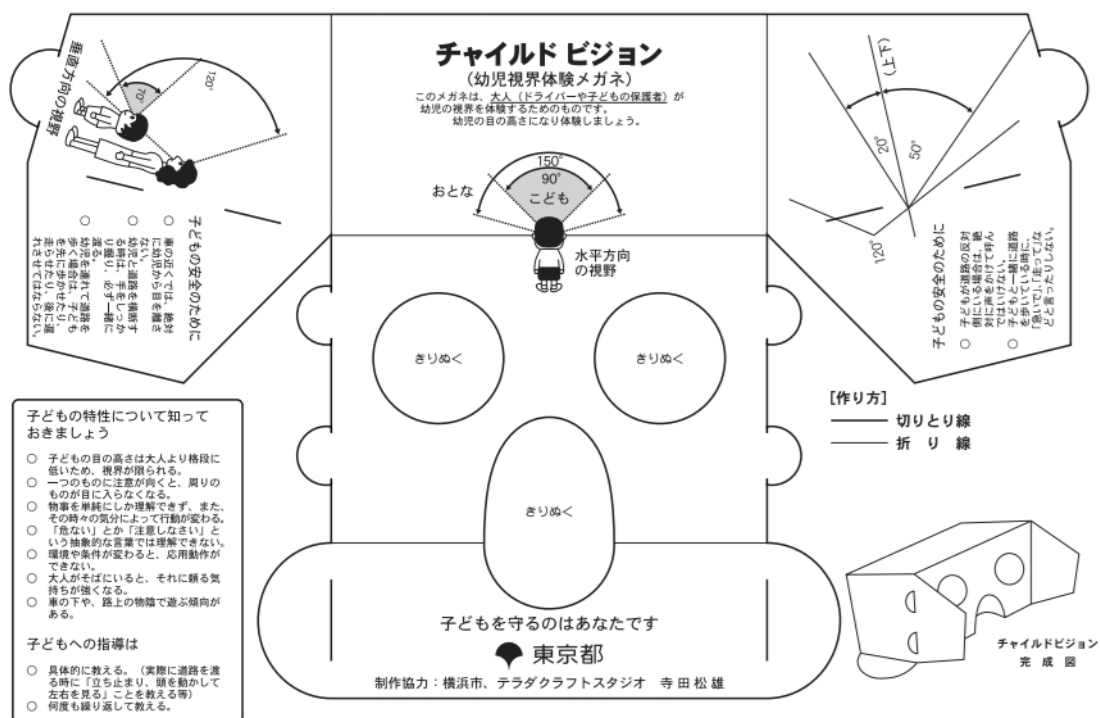
2 方 法

- 1) 調査協力者：A短期大学において、子どもの健康と安全を受講している2年生のうち、20XX年X月のチャイルドビジョンを用いた授業を受講し、その後にレポートを提出した114名の保育学生とした。
- 2) 調査方法：チャイルドビジョンを用いた散策を体験後、課題としてレポートを提出してもらい、本研究においてはそれを分析対象とした。
- 3) 課題内容：①子どもが興味を持つと思った場所や物
②子どもにとって、危険だと思った場所や物
- 4) 分析方法：本稿においては、子どもが興味を持つと思った場所や物についてのみ、質的帰納的方法を用いて分析をした。保育学生のレポートから得られた言語的表現をデータ化し、子どもが興味を持つと思った場所や物に関連した文脈を抽出した。抽出した部分は、保育学生の言葉の意味を損なわないようにコード化を行い、各コードの意味の類似性に基づき分類し名前を付け、カテゴリーを生成した。

3 チャイルドビジョンとは

子どもの視界をおとなが理解し、その見え方の違い・感じ方の違いを意識するためのツールで、

図1 チャイルドビジョン



引用・参考文献
ステイ・サンデルズ：交通のなかの子ども
日本自動車工業会：子どもの道路横断行動からみた交通安全対策に関する研究報告書

(出所) 東京都福祉局ホームページ。

子どもの視界を疑似体験することができるメガネである。子どもの視界を体験することは、子ども理解につながり、子どもの安全を守るだけではなく、子どもの目線で物事を考えたり、子どもの気持ちに寄り添うことにも役立つ。NPO法人CAPセンターJAPANや東京都福祉局などのホームページから自由にダウンロードし、印刷して使用することができる（図1）。

4 子ども理解のための体験内容

- 1) チャイルドビジョンを装着し、軍手2枚を重ねてつけ、手の動かしにくさを体験するために、クレヨンで折り紙に絵を描いた。
- 2) チャイルドビジョンを装着し、A短期大学の校舎内・敷地屋外を散策した。

5 結 果

1) 子どもが興味を持つと思った場所や物

チャイルドビジョンを装着し、学内の敷地を散策した時に気づいた、子どもが興味を持つと思った場所や物については152の回答があり（複数回答有）、【らくだ山（築山）への愛着】、【子どもの目の高さの世界】、【小さな生き物の発見】、【何気ない場所での気づき】、【秋を感じる収穫物】、【香りで感じる秋の植物】、【イチヨウの特徴への関心】、【秋にしか見られない植物】、【食べられる植物へのワクワク感】、【身近な自然遊びへの気づき】、【大きな植物との触れ合い】、【体を動かすことができる校庭】の12個のカテゴリーが抽出された。

カテゴリー分類、記述数および記述例については表1の通りである。

表1 子どもが興味を持つと思った場所や物

カテゴリー	記述数	記述例
らくだ山（築山）への愛着	38	子ども目線になるとらくだ山が高く見え、大きならくだ山に登りたいと思う
		らくだ山は駆け上るのも下るのもスピードが出て面白い
		らくだ山で体を動かしたり、ダンボールで滑ったり寝転んだり、遊びの幅が広がり、体を動かし発達に繋がる
		らくだ山で登ったり下りたりすることで、芝生の感触を感じることができる
		見えないらくだ山の向こう側に興味をもつ
子どもの目の高さの世界	20	花壇の中をよくのぞいてみると、小さな花がたくさん咲いていて、ジャングルのように面白い
		木の切り株の模様が想像しながら遊ぶ
		子ども目線になってよく見ると、葉っぱの形や大きさの違いに気づいた
		しゃがんでみると、芋虫のような草が生えていた
		草の中に落ちている石に興味を持った

小さな生き物の発見	17	溝の中に落ち葉が詰まっていて、そこに小さな虫がたくさんいる
		芝生の中に鈴虫、バッタ、カマキリなどさまざまな虫がいた
		ダンゴ虫やいろいろな小さな虫がいて子どもは夢中になって遊ぶ
		植物の中に小さなテントウムシを見つけた
		たらいの中で動いている亀に興味を持つ
何気ない場所での気づき	14	じゃりじゃりの道。歩くとじゃりじゃりと音が鳴って気持ちいい
		子ども目線になると、地面のコンクリートの模様の面白さに気づく
		マンホールの穴に興味を持って指を突っ込みたくなる
		いつも見ている大きな岩で子どもなら登って遊べる
		泥水が入っているバケツで泥遊びをしそう
秋を感じる収穫物	12	収穫間近のさつまいも畑で秋を感じることができる
		育てているさつまいもが成長していることに気づき、芋掘りへの興味が高まる
		ナスなどを育てていて、普段食べているものがどうやって育っているのか気になって食べてみたいと思う
		ナスは枝になって、さつまいもは土の中に埋まっていることなど興味を持つ
		ナスの花が咲いていて興味を持ち、ナスは花から実がなることを知る
香りで感じる秋の植物	9	金木犀の香りで秋を感じることができる
		金木犀の香りに子どもたちが興味を持ち、香り探しの遊びをすることができる
		金木犀の花の色や形に興味を持ち、色水などの遊びに使える
イチョウの特徴への関心	8	鮮やかなイチョウの色に興味を持つ
		イチョウの葉の形は、普通の葉の形と違うので、ハートや扇子に見立てて遊ぶことができる
		落ちている銀杏の実も遊び道具になる
秋にしか見られない植物	7	緑色だった葉っぱが紅葉していることに気づく
		落ち葉を拾って集めたり、押し花にしたりできる
		葉と葉の間に黒い実がたくさんできていて興味を持つ
食べられる植物へのワクワク感	6	食べ物の木は滅多にないので柿の木に興味を持つ
		柿の木の中でザクロの実を見つけ、ワクワク感を感じた
		落ちている柿に興味を持つ

身近な自然遊びへの 気づき	5	植物がたくさん生えているところは秘密基地のような感じで子どもが好みそう
		植物が生い茂っているところには虫もいて自然と触れ合え、昆虫などにも出会えて楽しめる
		自然に関わることで幅広い遊びが繰り広げられる
大きな植物との触れ合い	5	よじ登りたくなるような大きな木がある
		藤棚が垂れ下がり、子どもが手を伸ばして触ることができる
		虫を捕まえて、木に乗せたりできる
からだを動かすことができる校庭	5	広々した校庭は自由に動き回れるし芝生なので転んでも痛くない
		校庭は緑が多く自然に囲まれ、鬼ごっこなど駆けまわる遊びができる

6 考察

保育学生は、学内の敷地内において子ども目線で散策した時、子どもたちは自然物や自然遊びへの興味関心を多く持つことを予想した結果となった。A短期大学は住宅地に位置しているが、敷地内は広くはないが比較的自然が散在し、身近な自然を体験できる場所でもある。広々した芝生の校庭や、らくだ山として長年親しまれている築山、柿など実のなる大きな木やイチヨウの木、桜並木など、四季折々の植物の移り変わりも学ぶことができる。また、畑ではさつまいもやナス、白菜などを栽培し、日々の水やりなどの世話から収穫への期待まで、子どもが体験するであろう過程を想像しながら、保育学生同士が協力して物事を進める充実感も感じていたようである。

望まれる子どもの成育環境について仙田ら（2008）は、空間的面、時間的面、ソフト面の3つの視点から声明を出し、これまで検討を重ねてきた²⁾。特に時間的面においては、「体を動かし、自然を楽しむなどの成長段階に応じた適切な体験をする時間を確保」することや、ソフト面からは「群れ遊び、自然遊び、物作りなどの体験を通じて子どもが困難な状況を主体的に乗り越える力を獲得」することの大切さが示されている。また「自然の中で遊ばない自然欠乏症候群の深刻化」を指摘し、「乳幼児期に自然に接する方が免疫力が高い」という報告を受け³⁾⁴⁾、「健康やレジリエンスな子どもの成育の面でも自然環境との接触は重要な課題である」としている。

子どもの成育環境においては、様々な場面においてこれまでも、自然環境と豊かに関わることの重要性が語られてきた。環境庁（2020）は環境教育の推進において「幼児期からその発達段階に応じて、あらゆる機会を通じて環境の保全について理解と関心を深めることが重要である」とし、特に幼児期の環境教育では、「生きる力の基礎を培う時期として、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われること」が重要視されている⁵⁾。

2017年に同時告示された保育所保育指針⁶⁾ならびに幼稚園教育要領⁷⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁸⁾においても、3歳以上の「環境」の中で「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、子どもの心が安らぎ、

豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、子どもが自然との関わりを深めることができるよう工夫すること」と著している。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「自然との関わり・生命尊重」では、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切に思う気持ちをもって関わるようになる。」とし、自然に対する理解を踏まえ、子どもたちを育むことの重要性が示されており、保育所や幼稚園、こども園等においては、自然環境を活用した保育活動の工夫が広がってきている。

しかし市河ら（2018）は、「幼児期の自然体験活動が重要視されている半面、現代の保育を志す学生の自然体験は必ずしも豊かであるとは言えない。自然に触れる屋外での遊び体験が乏しい学生も少なくない。子ども達に、自然に触れる体験を通して感動を与え、それを共有していくためには保育者自身が豊かな自然体験の経験を積み、豊かな感性を持ち合わせておく必要がある」と述べている⁹⁾。昨今は都市化により保育所や幼稚園では身近な自然環境が乏しくなり、園庭さえも無い小規模施設も存在している。さらに都市で育った保育学生も自然環境や自然遊びといった経験値の低さが問題視されている中、保育者養成校におけるカリキュラムにおいては、必ずしも自然環境下における学びや自然体験、自然遊びが必修となっておらず、保育学生の中には、それらのような体験がまったくない状態で、卒業して保育者になる者も少なくないことが考えられる。今後都市化が進む中、保育学生が自然体験や自然遊びを積むことができるかどうかは、その保育者養成校の考えや、教員の裁量に委ねられていると言えるだろう。

〔謝辞〕 本調査にご協力をいただきましたA短期大学の保育学生の皆様に感謝申し上げます。

〔付記〕 本研究は研究者の所属する機関における研究倫理規程に基づき申請書面を提出し、承認を得て行った。

■引用文献

- 1) 三宅美千代（2022）「保育所実習の経験からつながる保育学生の乳児保育観」、『つくば国際短期大学紀要』48輯，61-72.
- 2) 日本学術会議（2008）「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて—成育空間の課題と提言—」.
- 3) Louise Chawla, Jack L. Nasar. (2015). Benefits of Nature Contact for Children, *Journal of Planning Literature*, 30, 433-452.
- 4) Frumkin H, Bratman GN, Breslow SJ, et al. (2017). Nature Contact and Human Health: A Research Agenda, *Environment Health Perspectives*, 125 (7).
- 5) 環境庁（2012）. 教育環境等による環境保全の取組の促進に関する法律
- 6) 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館.
- 7) 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館.
- 9) 市川勉・新戸信之・三浦累美・三宅孝昭（2018）「自然体験活動が保育専攻学生の生きる力に及ぼす影響—「キャンプ実習」からの検討」, 『松山東雲短期大学研究論集』48, 138 (83)-150 (95).